



義弟と交わる背徳の夜

夫の毘と義弟の執愛

presented by  
箱庭の樂園  
R18

「私に遠慮しないでいきなさい」

## 伊万里(いまり)

天谷（あまたに）家の当主で神主。  
子供ができにくい一族の男子は  
妻を親族で共有するという淫習  
があると聞いて以来、  
愛する妻を弟に寝取らせるという  
甘美な妄想に浸っていたが、  
とうとう実行に移してしまう。  
媚薬を飲ませた二人に  
一線を越えさせて以来、  
持ち前の人心掌握術で  
二人を翻弄する。



## 夫の策略で淫獄に堕ちていく ひな

伊万里の妻。  
伊万里だけを愛し、  
また愛され幸せな日々を過ごしていた。  
夫に媚薬を盛られ、夫の目の前で義弟  
の瞬と交わってしまう。  
罪悪感と背徳感に苦しみつつ、  
伊万里の希望で、瞬とも関係が続ける。  
最終的に二人に愛される悦びに  
目覚めていく。  
伊万里に依存し支配されている。  
本人も天然悪女。



「お前、無理やり犯されても感じるのか」

## 瞬(しゅん)

伊万里の弟。

直情型でまっすぐな性格。

ひなは初恋の人。

兄の本性を見抜き、

昔から憎んでいる。

兄の罠にかかり、

媚薬を飲まされ意思に反して

ひなを抱いてしまう。

その後、ひなを兄から守るため

誘拐、監禁する。



# あらすじ

箱庭の楽園

由緒ある神社の神主、  
天谷伊万里に嫁いだひなは  
愛し愛され幸せな日々を送っていた。  
伊万里に「子を授けられない場合、  
一族の男で妻を共有する習わしがある」  
と打ち明けられる。

祭りの夜、義弟の瞬とひなは、  
伊万里に媚薬を盛られ、交わってしまふ。  
ひなを独占したい瞬はひなを拉致し、  
ひなを犯すが、  
すぐに奪還しに来た伊万里に捕まる。  
伊万里は自分の支配下で  
三人で愛し合うこと望む。  
行き場のない想いを抱えて、  
三人の歪な関係は続くのだった。

夫の罨  
と義弟の執愛

# お品書き

箱庭の楽園

- 一、媚薬を盛られて目隠し、緊縛、3P(夫&義弟)
- 二、思い出編  
夫による婚前調教、開発、処女喪失  
(おにろり要素あり)
- 三、義弟による拉致、強姦(睡姦)
- 四、義弟にほだされ和姦
- 五、夫奪還からの3P
- 六、三人で墮ちる淫獄

※後ろの穴は一度も使いません。

夫の罨  
と義弟の執愛

義弟と交わる背徳の夜 サンプル版

二章 狂宴

「ひな、瞬と寝てくれないか」

「えっ？」

一瞬意味がわからず、頭が混乱した。今なんと言った？  
不妊の話と、瞬の話がどう繋がるのか。

「瞬の血を引く赤子であれば、天谷家の血筋で私の子も同然だ」

「な、なにをおっしゃっているのか、わかりません」

「言っただろう、私ももう若くはない」

伊万里は、今年で三十路になるが、子を望めぬほどの年齢ではない。

美しい顔で穏やかに微笑んではいるが、会話の内容は異常だった。

自分の弟に妻を抱かせようとは——正気ではない。

急に夫の顔が自分の知らない他人のように見えた。

ひなに原因があれば、他の女に産ませるといふ選択肢もあるが、そのことを思うと胸が張り裂けそうだった。

幼い頃より、伊万里だけを愛し、また愛されてきたひなには、他の男に抱

かれるなど考えられない。

「瞬君が誰かと結婚すれば、血筋は絶えぬと思うのですが」

瞬の子ならば、天谷家の血筋だ。

「瞬は誰とも結婚しないよ。それに色々事情があつて、養子を貰うというわけにもいかんのだよ」

意味ありげな笑みを浮かべ、伊万里は続けた。  
なぜそんなことがわかるのだろうか。

「私も色々考えた。ひな、わかってくれるね」

今まで伊万里の決めたことに逆らったことなどない。だが、その要求だけはひなは受け入れることなどできそうになかった。

夫から聞いた話が、幻聴ではないかまだ疑ってしまふ。

きつと実現することはないと、そう甘く考えていた。その要求を呑むなどできない。

「おいで、ひな」

「はい」

色々な不安がよぎって、夫の胸に顔を埋めた。

「嘘でしょう。嘘だと言ってください」



伊万里は黙ったまま、答えず、ひなを強く抱いた。

「祭りの淫らな空気に当てられた。いつもと違うことをしてもいいかい」  
「いつもと違うこと？」

答える間もなく、伊万里は後ろにまわると、ひなの目に手拭いをつけ、目隠しをした。

こういう悪戯を伊万里がするのは初めてではないが、先ほどの話といい、なんだか怖くなってしまう。

「ひな、口を開けて」

続いて、口移しで酒を飲まされた。  
呑み込むと異様な感覚に包まれる。

「な、なんですか。喉が熱いわ」

「なに、祭り用の酒だよ。男女が楽しむのに最適な――」

なにかおかしなものが入っていたとしか思えない。

喉から全身に熱が広がり、腹の奥まで熱くなる。

「お前はいつまで経っても、少女のように清らかなままだ」

伊万里の立ち上がる気配がしたかと思うと、あつという間に全裸に剥かれてしまう。

なにやら体に縄状のものを巻きつけられた。

「縛るよ」

「なにをなさるのです」

ひなを膝立ちさせると、後ろから縄がかかる。胸の形を突きだすように、縄がぎゅつとその輪郭を覆った。

「ああ」

酔った伊万里が時々こういうことをすることは前にもあった。

けれど今夜は特に淫らな空気が寝室に漂う。なにかよからぬことが始まるような――。

「ううっ」

肌を締め付けられ、体の自由を奪われると、自分の肉体の輪郭を意識せざるをえない。

「はは。肌が粟立っている。恐れもまた快樂の呼び水となる。覚えておくといいい」

そうこうしているうちに、背中を周った縄が、ひなの下腹部の敏感な場所まで締め上げた。

「あっ、あっ」





「ここに当たるように、こぶを作つてあげるからね」

どうやらひなの陰核がこずれるように、縄でこぶを作つたようだ。具合を確かめるように縄を引っ張ると、ちょうどそこにこぶが当たる。

自分では見えないが、全裸で淫らな体の凹凸を縄によつて、はっきりと主張されているのがわかる。

そこに視線を感じ、これから与えられる快楽を思うとぞくりとした。膨らんだ胸がより強調され、こぶに敏感なところが刺激される。それにさつき飲まされた酒のせいか、体に熱が籠っている。

「おやおや、もう縄がぐっしよりだ。お前は心も体も本当に素直ない子だね」

「ああつ。引つ張らないでください」

縄を引つ張られるたびに、興奮して露出した陰核が刺激され、腰を揺らして耐える。

伊万里に快楽を散々覚えさせられた体は、意思など無関係に反応するよう痙けられている。

「好きか、ひな。私が」

「はい。ひなは伊万里様だけを愛しています」

だからさつき言った話は撤回してほしい。



伊万里以外の男など知りたくない。

「もう胸の先も尖りきっている。触れてもないと言うのに」

胸の膨らみを強調するように肉を絞り上げられ、自分の体の曲線に視線を感じて欲情してしまう。

「んっ、ああ」

不意打ちで乳首をきゅっときつく摘まれ、声が出る。

「数年前まで小さかったのに、少しずつ大きくなっている」

「伊万里様が毎晩吸うから」

「はは。そうだった」

「もうお許しを」

「今日は少し我慢なさい。まだ夜は長いのだから」

かする程度に耳や首筋に伊万里が触れる。それだけで頭の中まで痺れるほどに感じてしまう。

思えば年端もいかぬ少女の頃から伊万里に快樂を教え込まれ、体が順応してしまっている。

他の男を知らないひなにとって、夫は絶対的な存在であり、無茶を言われなくても拒むことが考えられなくなっている。

低く甘い声で名前を呼ばれたり、優しい口づけをされるだけで、その先を求めてしまう。

「肌も透明で、まるで天女のような。瞬がお前のことを忘れられず、誰も愛せないのもわかるよ」

その名を聞いて、びっくりとした。あの話はなかったことにしてほしい。伊万里がひなの全身に触れていく。

羽がなぞるようなもどかしい触れ方だった。乳首に一瞬触れたかと思うと、腹を撫でる。

「あう、くっ、んん」

「敏感になってきているね。聞こえるかい。今宵はどこかしこから、男女のまぐわう声が聞こえるね」

耳を澄ますと、確かに女の悲鳴のようなものが聞こえた。自分はあのよう

に、だれかれ構わず足を開いたりしない。

今も昔も伊万里だけだ。

脇腹や背中に触れられ、のけぞるように耐えた。胸の周りをさすりはするが、中心には触れないので、もどかしさに胸を反らせた。

全身が敏感になっている。

「もつと触れてほしいかい？」

「はい。もつとください」

「素直だ。清楚なお前が私の前では、こんなにだらしなく足を開くと知ったら、みんなどう思うだろうか」

「いやあ、言わないでくださいまし」

ひなの望みどおり、口づけながら胸を強く揉みしだく。

「全身が薄桃色でとてもきれいだよ。性器や乳首も赤く染まって、男を求めている」

「男ではありません。伊万里様だけです」

「お前は私しか知らないからね。知ればそうとも限らないかもしれないよ」  
「いや、嫌です。知りとうございません」

ひなの乳首をきつくきつく吸い上げながら、下腹の縄を揺らす。それだけでもう達しそうだった。

あまりの刺激にひなの目に涙が滲む。

「お前が泣いている顔が好きなんだ。幸せにしたいのに矛盾しているね……」

ぺろりと涙を舐める。

「ひな、いいかい。これから瞬が来る。お前は黙って受け入れなさい。それがお前の務めだ」

「えっ」

先ほどまでの甘い時間が凍り付いたようで、ひなは驚いて身を起こそうとしたが、緊縛されていて、動けない。

「もしできないならば、私たちは別れなければいけないかもしれない」

「いや！ それだけは嫌です。伊万里様と離れるくらいなら、もう生きていたくありません」

あまりの残酷な言葉にひなの心は芯まで凍り付いた。

伊万里の胸に頬をすり寄せて、ひなは泣いた。

「よしよし、お前ほど一途で愛らしい乙女を妻にして、私はこの上なく幸せ者だよ。だがしかし、私には天谷家の血を絶やしてはならないという使命があるんだ。わかるね？」

死刑を宣告されたような気分になる。

伊万里の妻にふさわしい女になるためだけに、一心に頑張ってきたのに、捨てられたらもう生きてはいけない。

「わかり……ました」

目隠しの手拭いが涙で滲む。

しゃくりあげながら、夫の提案を涙と共に呑み込む。

「いい子だ。ご褒美にうんと悦くしてやるからね」

伊万里の唇や舌が、ひなの体中を愛撫する。いつもよりずっと濃厚で、切なく体が疼いた。

「ほら、足を開いてしっかり見せなさい」

ばかりと足を開くと、伊万里が縄をずらして、そこに顔を埋め、激しい口淫が施された。

これから始まる辛い出来事を思うと、夫を求める気持ちが増した。



先ほどの酒のせいか、ひなもおかしくなっていた。

「あぁっ。んん。いつもより凄い」

「これから瞬のものを受け入れるんだ。しっかりほぐしておこう」

指で陰核を刺激しながら、奥の奥まで舌が入ってくる。

「あぁ、伊万里様、もつと奥まで舐めて」

「ふふ。淫らなものだ」

「はっ、あぁっ。悦いっ、伊万里様ぁ」

「いつまでたつてもお前は私だけのものだ」

もう少しで絶頂が訪れそうで、足を大きく開き、もつともつととねだって

いると、扉が開く音がした。

「どういうことだ。呼び出しておいて、ひなが自分のものだと見せつけたか  
つたのか」

低い声がする。瞬だった。

よがり声をあげて、恥ずかしいところを開いているのを見られてしまった。  
目隠しでこちらからは見えないのがまだ救いだった。

「見ての通りだ。今宵は祭りだ。お前も混ざりなさい。酒は飲んだね？」

「……」

「顔が真っ赤じゃないか。あれは媚薬入りなんだ。発散するまで収まらない。  
言っただろう。ひなが一年経っても懐妊しない場合は、お前に頼むことにな

ると」

「ひなになんてことを。かわいそうに縛られて」

「ひなはもう、お前の思うような清らかな乙女ではないのだよ。ひなもお前に抱かれないそうさ。そうだね？」

訊ねられ、そうだと言わなければ離縁されてしまう。

「はい……私は瞬君に抱かれます」

「見ろ……、こんなに濡れそぼって男を欲している。もう蕩けているからすぐに受け入れられる」

興奮で開ききったひなの割れ目を指でさすり、瞬に見せつけるように。ぺろりと指についた蜜を舐めた。

「祭りの夜に孕むと家が栄えると言われている。私にはひなを孕ませることはできないかもしれないのでね」

「迷信だ。そんなものは。ひな……兄さんに強要されているのか」

首を振る。

「天谷家のためです」

「お前は兄さんに命令されたらなんでもするんだな。お前は奴隷なのか。自分の意思なんぞない人形以下の——。ひな、どうなっても知らんぞ」

呆れたような憐れむような投げやりな声だった。

「美しいだろう。この陶器のような肌、少女のような儂さと、淫らさをもつ女は他にはいない」

衣ずれの音がする。反射的にぶるりと震えた。

瞬が自分に覆いかぶさるのを感じた。胸を強く噛むように吸いつかれ、悲鳴をあげた。

「ひあっ」

視覚を奪われ、縛られたまま、夫ではない男に肌を晒す恐怖で肌が敏感になる。

「もう待ちくたびれているから、すぐに挿れてやりなさい」

伊万里がひなの太ももを広げると、蜜口に固いものが当たる。

伊万里様以外のものを受け入れてしまう――。

伊万里を愛しているひなには辛いことだった。後ろから伊万里に抱かれて  
いるのは救いか、それとも絶望か。

瞬は何度か割れ目を擦り、蜜を絡ませたあと、すぐに侵入してくる。  
一気に奥まで入ったかと思うと、何度か出し入れを繰り返される。

伊万里にほぐされた体はすぐに反応し、まごうことなき快感を覚えてしま  
う。

そのことにひなは激しく混乱した。

「あぁっ」

「ひなは最初はゆっくり突かれるのが好きなんだ。そうだろう、ひな」

「つあつあ、は……やあ」

夫以外のものを受け入れてしまった衝撃に涙が出る。

「ひなの中はいいだろう。男を悦ばせるために生まれたような女だ」

「うるさい！ 黙れ。俺はこの下らない淫習に抗議する」

「抗議でもなんでもいいさ。私の大切な妻を存分にかわいがってくれ」

瞬は怒りに任せて、ひなの中を乱暴に動いた。

伊万里の丁寧で執拗な性交に慣れているひなはその激しさに驚く。暴れるひなの太ももを夫が自ら開く。

「あつ、あつ、あつ。やあ激しい」

瞬が伊万里の言葉に反抗してか、激しく突いた。躍起になって、激しく穿つと、ひなの胸が激しく揺れた。

伊万里がその胸をあやすように揉みしだいた。

「お前は、遊び女ばかり相手にして、本気の女を抱いたことがないから、楽しませてもらうばかりで、おなごを楽しませたことなぞないのだろう」

「黙れと言っている」

「はは。知っておるぞ。ひなに似た女子ばかりと遊んで、すぐに捨てるとな。本物のひなはどうだ？ この水蜜桃のような乳。触ればすぐに反応する。長い時間をかけて私がそう躰けたのだよ」

「お前のような悪魔にだけはっ！ ひなを渡したくなかった！」



瞬の怒りはそのまま、激しい性欲となり、ひなにぶつけられた。

「ああうつ、激し、ひ、ああつ」

「いいだろう、ひな。たまには激しく突かれるのも。お前の器も悦んでいる」  
「ああ、見ないで」

媚薬のせいか、乱暴な交わりでも激しい快感を覚えてしまう。

こんな意に反した交合で、達したくない。

子を孕むだけならば、快樂など必要ない。

ひなを後ろから抱いたまま、伊万里はひなの胸の尖りをつまんだ。  
瞬はひなに口づけた。

「はっ、ひな……俺なら、俺ならこんなひどい目に遭わせないのに」

九章 夫による奪還

「ほう……ならば自分から瞬に抱かれたのだね？」

「はい……だから瞬君を許してください」

瞬に付けられた痕に、伊万里が上からさらにきつく痕をつける。

「どんな風に抱かれた」

「う、ああ。自分から跨って瞬君の上で腰を振りました……」

瞬をかばうためだ。薬をかがされたことや、無理やり犯されたことは言わない。

「ほう……。瞬の魔羅はよかったか」

「んん。はい。何度も達してしまいました」

正直に言うと、攻めが軽くなる。

乳首を啜えられ、もし嘘をつけば噛まれてしまう恐怖から、話してしまう。

「瞬になんと言われた」

「……」

これには困った。一緒に逃げようと言われたこと。好きだと言いつつ、こ  
とを言えばどうなるかわからない。

「どうもまだ隠し事をしているようだね」

伊万里のただならぬ雰囲気に怯えていると、

「ふふ、大事なお前を痛めつけるようなことはしないよ。お前の美しい顔は苦痛より快樂に歪むほうが似合うからね」

そう言つてひなをうつ伏せにすると、後ろ手に縛りあげた。

「あつなにを」

ひなの尻を突き上げさせると、まだほぐれていない蜜口に冷たいものが当たられた。

いつもなら口淫でさんざん蕩けさせ、ひながねだるまで挿入しないというのに。

「少し冷たいが、すぐにお前の熱で温まる。透明な水晶できているから、お前の内部の様子がよく見えるよ」

中に入れ入れされると、段々秘部が熱くなり、蜜が溢れて水音が響く。

「お前のここは、どんな状況でも反応する」

「あーっ、あ、ひっっ」

伊万里がひなを縛ることは、よくあるが、今日のは尋問のためだ。

水晶でできた張り型を何度も出し入れされて、ひなの理性は簡単に飛ぶ。

恥ずかしい部分を見られ、喘ぐことしかできない。

瞬が伊万里は優しい人間などではないと言っていた言葉を思い出す。あれほど優しい夫の冷酷な一面を見て、心が冷え切っていた。

「ひな、お前に頼みたいことがあるんだ」

「な、なんでもします」

伊万里の前でひなはどんな要求でも屈して受け入れてしまう。圧倒的な主従関係で逆らうことなどできはしない。

「瞬を助けてほしいんだ。お前以外愛せないのだよ。私と同じ呪いにかかっている。あのまま座敷牢でなにも食べずに死ぬ気かもしれない」

「そ、んな」

「私はなにもお前たちの不貞を怒っているわけではない。この家、私に従順でありさえすれば、どれだけまぐわつても構わない。ほらほら、お前のここで瞬を癒してあげなさい」

「うっ、やあ。ああっ」

ぐりぐりと最奥を張り型で刺激され果ててしまう。果てたあと激しく攻めるのが伊万里の好みだった。

そうすると絶頂が長引くのだ。

「あっ、あっ——っ！ もうお許しください」

「お前のそういうところだ。従順すぎていけないね。このまま瞬を帰しても、お前への未練で、瞬は一生独り身になるだろう。ましてお前の極上の体を知ったあとだ」

「私はどうしたら」

絶頂の快樂の強さと、やるせなさから枕に涙が滲む。

「瞬に家にとどまり、私と二人でお前と家を守り、愛するように説得しておくれ」

「あ、そんな」

二人に愛される甘美な喜びを心も体も知ってしまった。

「愛し合おう、三人で」

「ああ……伊万里様あ……」



水晶が引き抜かれると、すぐに伊万里が入ってくる。待ちわびた夫のものに、ひなの内部が歓喜に蠢く。

「ひなを愛してください。心も体も」

「ずっとそうしているじゃないか」

「あ、うっ……、奥もっ」と

「ああいい子だ。孕め、ひな」

「伊万里様の子種をくださいませ」

ゆらゆらと焦らすように動く伊万里を急かすように、ひなは尻を振りたくって、伊万里から搾りとろうとした。

「ひな。ここまで淫らになるとは私も思わなかったよ」

「伊万里様のせいなのに」

最後はひなの腰を掴み、伊万里が激しくひなの体を揺さぶった。体液が放出され、ひなの体内はそれを奥まで飲み干した。

十一章 墮ちる淫獄

「はあ、はあ、つまんじやいや」

伊万里はもったいぶって、ひなの乳首をひっぱたり、つねったりする。ようやく乳首を吸ってもらうと、膣がぎゅうぎゅうと瞬の男根に絡みつく。伊万里が片方の乳を吸うのを見て、競うように瞬が逆側を吸う。

「は、同時に吸っては嫌です。一人ずつ……ふああん」  
「嫌だ。待てない」

「お前も同時にされたほうがいいだろう」

ひなの乳を伊万里と瞬が同時に吸っている。

この淫らな共有から得られる興奮に、ひなは慣れることはなかった。

伊万里は、焦らすようにゆつくりと口に含むだけだが、瞬は絞り出すようにきつく吸う。

どちらも違う気持ちよさがある。

「ひなは少し我慢を覚えなさい。廊下まで声が漏れていたよ」

「駄目って言われると余計感じてしまって、はっ、はあ、それに瞬君のがひなの悦いところを突くからあ」

「ひなが感じやすすぎるだけだろう」

「本当にどうしようもなく淫らな子になってしまったね」

伊万里が少し寂しそうに呟き、二人が繋がっている場所に唇を近づけ、陰核を吸った。

「出し入れされながら、ここを吸われるのが最近のお気に入りだろうか？」

視界が真っ白になるほどの愉悦が下腹から広がる。

「あつ。ぐっ、や、それ、も。や、瞬くんもはげし、あ、吸わないでえ」「ほら、どうせ何回も気をやるんだから」

女の弱点をちゅうちゅうと吸われ、中を激しく突かれ、ひなは低く呻いた。陰部から淫水が飛び散る。

「あ、出ちやう、やあああ」

「ひな、布団がびしょ濡れだ」

「あとで新しいのを出せばいいさ。ひなの乱行はもう使用人たちも知っている。毎晩このように嬌声を上げていればな」

「あ……瞬くん。とめて、伊万里様ももういじらないで」

「駄目だ、ひな。仕置きた。お前は淫らすぎる」

「いやああ、奥つやめ、あ」

「達したな、ひな。もう男一人ではお前を満足させられぬ」

三人で愛し合うようになってから、ひなの性感は底なしとなり、一晩で何度も何度も絶頂するようになった。

見ていた伊万里がひなの乳を軽く擦る。

乳首に触れると、びくんびくんと体を震わせた。

「ああ、もうやめ……っ。一人ずつにして」

いつも最初に瞬と愛し合い、それを見て興奮した伊万里がひなを抱く。それが流れだった。

「今さらなにを言う。お前はなんでも受け入れるだけの器があるだろう」

瞬の男根が刺さったひなの割れ目をそっと撫でる。二人の下腹部は、ひなの蜜と潮でべとべとに濡れて光っている。

「いやらしい。もうこれ以上ないくらい固くなっている」

ひなの陰核を伊万里が二本の指で挟み抜き出す。  
瞬ももう心得たように、ひなの内部を刺激する。  
仲の悪い二人が息を合わせて、ひなを絶頂させるために協力する。

「あ、あ、きちやう、駄目、いく」

「私がいいと言うまで気をやっつては駄目だよ」

「無理……無理です、あっあーっ」

伊万里に駄目と言われたのに、達してしまった。

瞬を絞り上げるようにひなの中は収縮する。

「瞬君、出して。ひなの中に」

「ひなっ絞めすぎだ」